

主 題：生かされている目的を忘れない2

聖書箇所：ペテロの手紙第一 4章3－6節

「迫害に負けないでこれまでと同じように神に忠実に歩み続けなさい」と奨励するペテロのメッセージを学んできました。それは、忠実に生きることが、

- ・あなたの人生に「勝利をもたらす」から。罪に対する勝利を得ることができるのです。
- ・あなたに本当の幸せをもたらすから。神の祝福を受けます。
- ・何ものによっても得ることのできない満足、喜びをもたらします。

ペテロは、主に対して「忠実に生きること」こそ、永遠に価値ある生き方だからと教えるのです。だから、どんなときでも忠実に歩み続けるにはどうすれば良いのかを学ぶことが大切です。

今日も続けてそのカギを学んで行きます。ペテロはこの4：1－6で次のように教えています。

イエスの生き様を覚えよ。4：1－3

神のさばきを覚えよ。4：4－6

1. イエスの生き様を覚えよ 1－3節

イエスは神のみこころに完璧に従われました。ゆえに、その模範に従うようにとペテロは言います。それは私たちに可能でしょうか？可能です！救われて新しく生まれ変わったあなたにはそれができるのです。これまでは、「神に逆らう生活」「罪を犯し続ける生活」「自分第一」「この世のことしか考えない」生き方でした。しかし、新しく生まれ変わったのです。「神に従って行こう」「神に喜ばれることをしよう」「人を愛し、自分のことより彼らの益のために尽くそう」「永遠を考えて今日を生きよう」という新しい生き方が始まったのです。この生き方こそ永遠に価値がある生き方なのです。

この「忠実に神のみこころに従って行きたい」という願いは、新生した人の特徴です。新生した人にはこのような新しい願いを、思いを主が与えてくださるのです。II コリント5：15には新生した人の生き方が書かれています。「また、キリストがすべての人のために死なれたのは、生きている人々が、もはや自分のためにではなく、自分のために死んでよみがえった方のために生きるためなのです。」と、新生した人は「生き方が変わる」のです！

「みこころに従う」、言い方を変えると「主に忠実でありたい」という願いをもって生きていることこそが、新生した人、救われた人の特徴の一つであることを前回(11/2)学びました。

二つ目に、その人は

2) 罪を忌み嫌う(罪から離れる) 3節

「あなたがたは、異邦人たちがしたいと思っていることを行ない、好色、情欲、醉酒、遊興、宴会騒ぎ、忌むべき偶像礼拝などにふけったものですが、それは過ぎ去った時で、もう十分です。」

「異邦人たちがしたいと思っている生き方」とは？この「異邦人」は人種の意味ではなく救いに関してのことです。すなわち、救われていない人のことです。I ペテロ2：12にある「異邦人の中にあって、りっぱにふるまいなさい。」と同じです。ペテロは救われた人はその生き方が変わることを対比を用いて教えるのです。「救われている人とそうでない人」、「人間の欲望のままに生きる生き方と神のみこころに従って生きる生き方」の対比です。

そして、「したいと思っている」とは、それらが彼ら自身の選択であることを示します。六つ挙げられています。

●神を知らない人々が選択する生き方のその特徴は

好色＝不道徳、放縦な生活、放逸な欲望、男女間のだらしない振る舞い

情欲＝不純な欲望

醉酒＝「酒」と「あふれる」が合わさったことばで、飲酒癖、酒好き、酒浸り、習慣的

遊興＝元来はギリシャ神話の酒神バックスその他の神々を祝う祝賀行事、酒宴、酔っ払って道を横行する若者たちを表わします。

宴会騒ぎ＝酒を飲むパーティー

「忌むべき」とは、法に反する、違法の、法に禁じられているという意味で、性的な罪、酒が偶像礼拝と強く結びついていました。そして、これらの罪がすべて複数形であるのは、これらのことが頻繁に行なわれていたことを表わすのです。

偽りの神は正しいこと、聖さを教えません。また、それを要求もしません。自分の欲望のままに、そ

れを満たすために生きることが認められているのです。だから、そのような「神」は都合が良いのです。人間は神によって造られたゆえに、造ってくださった神を心では求めます。だから、宗教が存在します。しかし、自分の願望、欲望を容認してくれる存在でなければ信じたくないのです。人間とはいかに利己的な罪人であることか！そのような神でないものを崇拜し、それに従ってきたのです。

「ふけたもの」とは「生活してきた、暮らしてきた」（完了形）という意味で、救われる前の生活を考えなさいと言います。本当の神を知らずに生きてきた人生、自分の好きなことを選択し、思い通りに生きてきた人生です。「過ぎ去った」とはこれも完了形です。過去の話でもう終わったことだと言います。「もう十分」とは、そのような価値のない無駄な生活は「もう十分でしょう、喜びも満足も祝福ももたらさなかった人生」なのだからと。そのような生活のどこに喜びや祝福があったか、神の存在を、その教えを無視した人生がもたらすと約束しているのは「地上における不幸せ」だけでなく「永遠の苦しみ」です。その人生の終焉は「永遠のさばき、地獄」であると神は言われるのです。ローマ6：23「罪からくる報酬は死です。」。

ローマ6：20－22を見ましょう。「罪の奴隷であった時は、あなたがたは義については、自由にふるまっていました。21 その当時、今ではあなたがたが恥じているそのようなものから、何か良い実を得たでしょうか。それらのものの行き着く所は死です。22 しかし今は、罪から解放されて神の奴隷となり、聖潔に至る実を得たのです。その行き着く所は永遠のいのちです。」。また、エペソ2：12には「そのころのあなたがたは、キリストから離れ、イスラエルの国から除外され、約束の契約については他国人であり、この世にあって望みもなく、神もない人たちでした。」とあります。

これらの罪がイエスを十字架に追いやったのです。そのような人生のどこに未練が、引かれるところがあるのでしょうか。このような罪はもう過ぎ去ったのです。今は新しく生まれ変わったのです。罪を忌み嫌う人へと、罪ではなく神に喜ばれることを選択する人へと変えられたのです。このような「新生」を人のうちに成してくださる神なのです。

2. 神のさばきを覚えよ 4－6節

ペテロはここでも、神のさばきへの備えをしていない人々と備えをしている人々を対比して教えます。

1) 神のさばきへの備えをしていない人々、その特徴 4, 5節

それは不従順な生き方です。

(1) 今の楽しみだけを追求する(4a節)＝「度を過ぎた放蕩」です。自堕落な生活を送るのです。「放蕩」とは、救いがたいこと、堕落した生活で、辞書には「酒色にふけて品行がおさまらない、酒や女におぼれること」とあります。「度を過ぎた」とは、注ぎ出す、あふれ出す、過度、洪水を意味します。

(2) 神を畏れない(4節)＝「不思議に思い、また悪口を言います」と彼らは神によって変えられた人たちに対して「悪口」を言うのです。彼らは、人に対して：評判に傷をつける、中傷、口汚くののしるのです。そのわけは、「不思議に思う」からです。これは「驚く、不審に思う」という意味ですが、このことばにはまた「怒る」という意味が含まれています。「自分の考える生き方に当てはまらないことは何でも訳もなく怒ってしまふ人…」です。この憤り、また怒りをもった驚きを、ペテロは語っているのです。聖く正しく生きようとする者を“変わり者”と思い、罵ります。いかに自分が正しきや聖さを愛しても求めてもいないことが明らかです。

また、神に対して：「悪口を言う」とは、神や神聖なものに対して軽蔑的に見下げて語るという意味もあります。不敬な言動、神に反抗することを意図的に話すのです。ゆえに、このことばは英語の「神への冒瀆、不敬」を意味することばの語源になっているのです。すなわち、彼らは神によって変えられた人たちだけでなく、彼らを変えた神に悪口を言うのです。

⇒これが神を信じていない人々の特徴です。彼らは神を憎んでいます。

ヨハネ3：19－20「そのさばきというのは、こうである。光が世に来ているのに、人々は光よりもやみを愛した。その行ないが悪かったからである。20 悪いことをする者は光を憎み、その行ないが明るみに出されることを恐れて、光のほうに来ない。」、ゆえに、イエスに従う者に対しても同様に扱うのです。イエスのメッセージに耳を傾けて聴こうともしませんし、従おうともしないのです。かえって逆らい続けるのです。詩篇36：1「罪は悪者の心の中に語りかける。彼の目の前には、神に対する恐れがない。」、ローマ3：18「彼らの目の前には、神に対する恐れがない。」

(3) 神の警告を聴かない(5節)＝神による審判があります。「さばこうとしている方」とあります。a) 裁判官はイエスです。使徒10：42「イエスは私たちに命じて、このイエスこそ生きている者と死んだ者とのさばき主として、神によって定められた方であることを人々に宣べ伝え、そのあかしをするように、言われたのです。」。b) すべての人への審判です。「生きている人々をも死んだ人々をも」

とは、キリストが地上に戻ってこられる時にすでに死んでしまっている人、また、生きている人、そして、真の神イエスを信じていないすべての人々です。c) 個人的な審判です。「申し開きをしなければ」ならないとは精算のことです。ローマ 14：10, 12にも「10 それなのに、なぜ、あなたは自分の兄弟をさばくのですか。また、自分の兄弟を侮るのですか。私たちはみな、神のさばきの座に立つようになるのです。12 こういうわけですから、私たちは、おのおの自分のことを神の御前に申し開きすることになります。」とあります。

神はまた旧約でも同じメッセージをされています。エゼキエルは人々に警告をしました。神の正義と悔い改めた罪人へのあわれみとを語り続けました。個人としての責任を語ったのです。エゼキエル 18：30-32「それゆえ、イスラエルの家よ、わたしはあなたがたをそれぞれその態度にしたがってさばく。——神である主の御告げ。——悔い改めて、あなたがたのすべてのそむきの罪を振り捨てよ。不義に引き込まれることがないようにせよ。31 あなたがたの犯したすべてのそむきの罪をあなたがたの中から放り出せ。こうして、新しい心と新しい霊を得よ。イスラエルの家よ。なぜ、あなたがたは死のうとするのか。32 わたしは、だれが死ぬのも喜ばないからだ。——神である主の御告げ。——だから、悔い改めて、生きよ。」。生と死は神への個人的責任に掛かっていたのです。逆らい続ける者はさばきへと向かい、罪を悔い改めて主に立ち返る者へはいのちが与えられるのです。

2) 神のさばきへの備えができている人々 6節

自堕落な生活を捨てて神に立ち返り、神の警告に聞き従いました。神の救いを受け入れたのです。6節「というのは、死んだ人々にも福音が宣べ伝えられていたのですが、それはその人々が肉体においては人間としてさばきを受けるが、霊においては神によって生きるためでした。」。

「死んだ人々」＝肉体的にもうすでに死んでしまったキリスト者のことです。ある人は迫害のゆえに殉教しました。このことは次の「それは」という接続詞と、その後に続く文章が明らかにしています。ここで「福音が宣べ伝えられていた」と受け身で書かれているのは、彼らが誰かから福音を聞いたことを明らかにしています。恐らく、使徒たちやまたその他のキリスト者から福音を聞いたということを教えているのです。「今はもうすでに死んでしまっているけれど、生きていたときに彼らには福音が伝えられていた」のです。

(ここで注意しなければいけません。死後も福音を聞き信じる機会があるということを教えてはいないのです。福音を信じ救われることができるのは生きている間だけです。)

「それは」という接続詞はここから目的が述べられることを示しています。すなわち、福音が彼らに語られた目的は何かを、これから教えるということです。その目的とは「彼らが永遠に生きるため」であったことを教えています。そのことをペテロはここでも対比をもって教えるのです。

肉体においては人間としてさばきを受ける

霊においては神によって生きる

この対比を良く見てください。

「肉体においては」＝生きている間 ＝人間として＝人のさばき

「霊においては」 ＝死んでからのこと＝神によって＝神のさばき

● 人のさばきと神のさばき

(1) 肉体においては人間としてさばきを受ける

この地上に生きている間のことです。この世において人間の基準、判断によってさばかれ殺されることを言っているのです。この当時、信仰のゆえにいのちを落とすキリスト者がいたのです。

(2) 霊においては神によって生きる

これは死んでからのことです。死んだ後は神の基準、判断によってさばかれます。「神によって生きる」、これは永遠に生きること、永遠のいのちです。神が永遠に生きておられるように！

ペテロは言います。キリスト者である彼らは生きているときは人によってさばかれ、その信仰ゆえに殺されました。しかし、神によってさばかれるときは、その信仰ゆえにいのちが与えられるのです。「さばきを受ける」とは過去1回だけのできごと(死)を指し、「生きる」は現在形で現在の状態を指しているのです。

この世にあつてはこの世の基準によってさばかれます。しかし、最後には神の基準によって真実なさばきが成されるときが来ます。ゆえに、恐れずに忠実に歩み続けなさい！とペテロは教えるのです。

一つの実話です。Bonnie & Gary Witherall という宣教師夫妻は、レバノンのシドンという所に遣わされました。彼らはアラブ語を話しアラブの文化を理解して、危険な場所であったけれどそこで主に仕えました。彼らが街を歩いていると、店の人たちは飛び出してきて彼らと抱擁し愛を示したのです。レ

バノンに住むパレスチナの人々を助けたいとの一心で献身的に働きました。昨年のある日、妻は3発の銃弾を浴びて亡くなりました。彼は憎しみでその場所から逃げ出すことよりも、愛をもって苦しんでいる人々に仕えているのです。